

〈研究ノート〉

「親子療育グループにおける 支援者用チェックシート作成と導入の試み」

三 木 陽 子 *

要約

児童発達支援の施設では、幼児期に行われる療育支援として、親子グループでの活動が行われている。親子グループにおける支援目的の一つに、親の子ども理解と親子間の適切な相互作用を促すことで、安定したよりよい親子の関係性を育てていくことが挙げられる。本研究では、支援者が親子関係促進という目的にそった支援を行ったかを振り返り、次の支援場面でその目的を意識できるよう省察用チェックシートを作成した。2つの親子グループで、このチェックシートへの記入を半年間行った。記述内容の分析から、支援には子どもの発達特性に関する深い理解に基づいた関わりが求められること、その上で、支援者が親子の関係性促進を意識した支援を行っていることが確認された。しかし、記述数の少ない項目やねらいに相当しない支援内容の記述もみられたため、今後の効果研究に向けて、チェックシートの修正を行った。

キーワード 児童発達支援 親子グループ 親子関係 チェックシート

目次

- 1 問題と目的
- 2 方法
 - 2.1 対象者
 - 2.2 実施期間
 - 2.3 チェックシート導入の手続き
 - 2.4 チェックシートの構成
 - 2.5 倫理的配慮
- 3 結果と考察
 - 3.1 チェックシートへの記入数について
 - 3.2 項目1の分析
 - 3.3 項目2の分析
 - 3.4 項目3の分析
 - 3.5 項目4の分析
 - 3.6 項目5の分析
 - 3.7 項目6の分析
 - 3.8 項目7の分析
- 4 結論

1 問題と目的

発達に支援を要する子どもが通う児童発達支援の施設では、幼児期に行われる療育支援として、子どもが単独で通園する形態の他、親子で通園し共に活動を行う親子グループの形態をとっている場がある。厚生労働省が定めた児童発達支援ガイドライン（2017）では、児童発達支援の目標として、子どもの状態や発達過程・特性に配慮しながら成長を支援するとともに、保護者の意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、職員の専門性を活かして支援に当たることが挙げられている。幼児期に保護者との安定した関係を形成する目的において、特に支援初期の段階では親子グループでの活動は理に適うものであると思われる。

前述の児童発達支援ガイドラインでは支援の内容に関して、本人支援の項目においても家族支援の項目においても「アタッチメント（愛着行動）形成の支援」が挙げられている。その説明として「身近な人との親密な関係を築き、その信頼関係を基盤として、周囲の人との安定した関係を形成するための支援を行う」とあるが、子どもと保護者との関係性に対する支援に関して具体的な方法は明記されていない。

児童の発達支援において、保護者と子どもの、いわゆる親子の安定した関係性の形成が重要であることは広く認識されているが、親子関係が支援のターゲットであるという意識は薄く、また、どのような方法で関係性への支援を行うかについても曖昧なままであるように見受けられる。現状において、子どもの発達支援と親への支援はそれぞれ別個に支援目標と計画が立てられることが多い。もちろん子どもと親のそれぞれへの支援は必要なものであり、各々の支援が有機的に親子関係に影響すると考えられるが、特に幼児期の最初の段階の支援においては親子関係自体を支援の対象として焦点化することも重要であると考えられる。子どもにおいて人との安定した関係の形成は、他の全ての領域の発達を促す基盤として最重要な支援目標であると考えられるからである。

このような状況をふまえ、今回、親子療育グループの目的として、安定した親子関係の形成に焦点を当て、どのような支援のあり方が支援の質向上に有効であるのかを検討することにする。その試みとして、支援者が、親子関係への支援を療育の目的として意識し、その視点での関わりを行うことができたかを振り返るチェックシートを作成した。チェック項目は、親の子ども理解とその理解に基づいた適切な相互作用経験が安定した親子関係を促進するとの考えに基づき作成した。親子関係に関する理論背景としては、愛着研究や発達心理学の研究領域で見出されている親子相互作用における知見を取り入れた。

なかでも、Fonagyが提唱したメンタライゼーション（Bateman,A. and Fonagy,P.,2004）の知見は、愛着研究でも多く取り上げられ、臨床実践への応用が盛んに行われている。メンタライゼーションとは、心で心を思うこと（Holding mind in mind）といわれ、自分や他者を感情や信念、意図や欲求といった心を備えた存在として捉え、人の行為をそうした心の状態と関連付けて理解しようとする能力を指す。親のリフレクティブ機能ともいわれる親のメ

ンタライジング能力が子どもの安定した愛着と関連していることが様々な研究により明らかにされている（例えば、Slade et al,2005）。メンタライゼーションは特別な心的機能というものではなく、親は通常に、意識せず行っているものであるが、一方、発達支援を要する子どもに対するメンタライゼーションは困難であることも推測される。よって、支援を要する子どもにおいては、親のメンタライジングを支援し、よりよい親子の相互作用を支える必要があると思われる。

その他、発達心理学の領域で研究された知見も、親子の相互作用を促進するためのチェック項目作成の際に参照した。なかでも、二人称的アプローチ（レディ,2015）や共同注意（トマセロ,1999）といった他者の注目への気づきや注意の共有といった、最初期に人との相互作用のなかで培われる発達についても、その知見をふまえて項目に反映した。

本研究は、このチェックシートを療育現場に導入し、実際に支援者がシートに記入した内容の検討を行う。そこから、実際にどのような親子関係への支援が行われており、チェック項目のねらいにそった支援が行われているのか、さらにチェックシートに改変すべき点はあるのかを確認することが目的である。

2 方法

2.1 対象者

幼児期の親子療育グループを担当している支援者4名。女性3名、男性1名、うち常勤職が2名、非常勤職が2名、職種は保育士、児童指導員である。

2.2 実施期間

チェックシート記入は、2020年10月から2021年3月の6か月間である。ただし、グループ活動は、2020年4月から開始されている。（後述のYグループは前年度の2019年度から継続したグループである。）

2.3 チェックシート導入の手続き

(1) 実施の機関、グループ参加者について

関東圏にある児童発達支援センターで行われている2つの親子グループ（Yグループ、Zグループ）にて実施を依頼する。それぞれのグループは常勤職員1名、非常勤職員1名の2名（Yグループ；支援者A、B／Zグループ；支援者C、D）で担当している。Yグループは週2回実施、3歳児とその親5組が参加していた。参加の理由は、言葉や成長が遅れている、落ち着きがないといったことであった。Zグループは週に1回実施され、4歳児とその親6組で、参加理由は、コミュニケーションの難しさや会話が上手くいかない、かんしゃくがある、集団で行動ができないといったことであった。どちらのグループにも保育園、幼稚園に通っている子どもがいた。

(2) 実施の方法

グループ担当の支援者に支援者用チェックシートへの記入を依頼した。グループ実施後できればその日のうちに記入してもらい、2週間～1か月に1回程度の頻度で、通常の業務に支障のない範囲で継続して記入することを求めた。支援者で集まり話し合いながら記入することも数回試みたが、大半は支援者個人で時間をみつけ、一人で記入していた。

(3) 筆者の関与について

本研究は参与型アクションリサーチの方法をとり、筆者は親子療育グループに心理士として関わった。各グループの活動に月に1回程度参加し、終了後の支援者の振り返りに出席した。そこで、本チェックシートについて適宜説明を行い、支援についての助言をした。

2.4 チェックシートの構成

チェックシートは以下の内容を書き込む様式となっている。

・実施日 ・グループ名 ・支援者氏名 ・グループ参加親子組数
・配慮事項のチェック項目；1) 支援目標である親の子ども理解と適切な相互作用経験による安定した親子関係の促進を意識して親子に関わった、2) 親の心理的状态に注意を払いながら、出過ぎることなく、引き過ぎることなく関わった、という二点の配慮項目に対して、はい・いいえにチェックを入れる。

これは支援者がいつも支援目標を意識して関わるができるように、また、親との距離感を意識して関わるができるように設けた項目である。

・支援のチェック項目1～7；項目にある支援を行った際に、親子名と支援内容を書き込む。各項目の内容とねらいについては、結果と考察の部分で後述する。

・まとめ；活動を振り返り考えたこと、話し合いで感じたことを書く欄として設けた。

・次回に向けて；次回の活動で意識して支援したいことを書く欄として設けた。

2.5 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、実施機関、グループ担当の支援者、また参加の保護者に対して、研究主旨の説明を行い、書面による同意を得た。また、筆者の所属機関における研究倫理審査により承認を受けている（倫理審査番号030）。

3 結果と考察

3.1 チェックシートへの記入数について

チェックシートに記入のあった回数と総計、記述率を各支援者、グループごとにまとめたものを表1に示す。

表1 チェックシートの記入回数、記述率

支援者／グループ	記入回数	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	まとめ	次回に向けて
支援者A	10	7 (11)	5 (6)	1 (1)	6 (7)	6 (11)	1 (1)	10 (14)	10	6
支援者B	8	7 (7)	2 (2)	4 (4)	2 (2)	1 (1)	1 (1)	8 (9)	4	2
Yグループ計	18	14 (18)	7 (8)	5 (5)	8 (9)	7 (12)	2 (2)	18 (23)	14	8
支援者C	7	3 (3)	0 (0)	1 (1)	2 (2)	6 (6)	0 (0)	6 (7)	2	2
支援者D	11	5 (5)	5 (5)	6 (6)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	5	6
Zグループ計	18	8 (8)	5 (5)	7 (7)	4 (4)	8 (8)	2 (2)	8 (9)	7	8
合計	36	22 (26)	12 (13)	12 (12)	12 (13)	15 (20)	4 (4)	26 (32)	21	16
項目記述率		61.1%	33.3%	33.3%	33.3%	41.7%	11.1%	72.2%	58.3%	44.4%

注：() 内は記述数

各支援者は半年の間で8回～11回チェックシートへの記入を行っており、平均9回記入していた。項目ごとの記述回数をみると、項目により記入率に差がみられる。項目1や項目7は6～7割記入されているが、項目2から項目5は3～4割程度、項目6はかなり低く1割程度であった。支援者により、記入の多い項目と少ない項目といったばらつきもみられ、記入しやすい項目に個人差があることも確認された。

3.2 項目1の分析

次に、チェックシートの各項目について、その項目のねらいを説明し、実際の記述内容が項目のねらいに相当した支援であるかを確認する。その上で、記述された内容の特徴について考察を行う。なお、記述内容が各項目のねらいに相当しているかをみたが、相当しないと判断した記述であっても、療育支援として意味のあるものであることに留意されたい。

項目1について、ねらい、記述例、ねらいに相当する記述数を表2に記す。

表2 項目1のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	親に対して、子どもの行動の意味（感情、思考、意図、欲求）を、発達特性を基にして、伝えた。		
ねらい	子どもの行動の背後にある心理状態に注意を向け認識するメンタライゼーションを、発達特性を考慮した上で支援者が行い、それを親と共有することで親のメンタライゼーションを促す。		
記述例	例1：片栗粉あそびの途中で、児が席からはなれた際、粉から水を入れた感触の変化にびっくりしたのでは？と伝えた。 例2：いつものおもちゃが見つからず棚を何度開けても納得しなかった。いつものおもちゃがないことで納得できないことを伝えると「あーわからなかった…」「そんなに気に入っているなら同じの買う」と親は言っていたので、それを家で遊びたいというより、まずここではそれを見て落ち着くということかもしれないと話した。		
ねらいに相当する記述数（総数26）	ねらいに相当する 17 (65.4%)	判断が困難 6 (23.1%)	ねらいに相当しない 3 (11.5%)

項目1は、子どもの内面に注意を向け、心理状態を推測するといった親のメンタライゼーションを促すための支援である。発達支援を要する子どもにおいては、親が子どもの行動からメンタライゼーションを行うことは困難であったり、読み誤ることが生じやすい。通常、典型発達の子どもの場合、言葉を発する前の乳児期であっても、子どもと親の非言語的コミュニケーションは盛んに起こり、親はそれらの情報を基に子どもの心理状態を読んでいく。また、親は典型発達の子どもの姿として既知であることやこれまでの親自身の経験を参照枠に子どもの状態を理解しようとする(三木,2012)。しかし、発達の遅れや様々な発達特性をもつ子どもにおいては、コミュニケーションにおける適切な発信が乏しかったり、あるいは、親の知識や参照枠とは異なる理由が背景にある場合がある。例えば、突然の泣きやかんしゃくが、感覚の過敏によるものである場合やある活動を「やりたがらない」のは、嫌いなのではなく理解できなかったことによる場合などである。発達支援を要する子どもの行動の意味を捉えるためには、発達過程や発達特性についての知識を有し、その時々状況からの確かなアセスメントができる支援者のサポートが必要となるだろう。子どもの心理状態を捉えることが難しい親に対して、支援者がメンタライゼーションを行い、それを親に伝え、親とともに子どもの心理状態について考えることが、親子関係への支援において重要になると考える。

記述内容を確認したところ、項目1のねらいに相当する支援として記述されていたものは、総数の26のうち17(65.4%)であった。説明された発達特性については、覚醒の状態や感覚、注意の問題などかなり原初的な身体感覚レベルでの発達状態に言及している記述が複数みられた。また、認知的な問題として、言語よりも視覚的な認知がわかりやすい点やパター的な決めといったこだわりについて説明し、子どもの行動の意味を伝えている記述がみられた。

記述のうち6(23.1%)は、ねらいに相当するものであるのか判断が難しかった。そこでは身体運動における困難さなど、発達状態や特性を親に説明をしているが、子どもの行動の意味を伝えているのかがわからなかった。ここでのねらいは、あくまでも子どもの心理状態に親の注意を向けさせ、認識することを促すためであるので、発達状態や発達特性のみを伝えたとする記述がねらいを満たすものであるのか判断が難しい。このことから、記入する者にとってどのような支援を意識して、ここに記入すべきなのかがわかりにくいことが推察され、項目内容の修正が必要であると思われる。

項目1の支援において注意すべき点があると考え。それは、支援者のメンタライゼーションが常に適切であるとは限らないことである。したがって、支援者の捉えを押しつけることなく親に伝えた上で共に考える、親の考えを聞くといったプロセスが重要である。また、支援者のメンタライゼーションを他の支援者と共有して振り返り、支援者同士で精度を高めていくことが望ましい。

3.3 項目2の分析

項目2について、ねらい、記述例、相当する記述数を表3に記す。

表3 項目2のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	子どもの内面（感情、思考、意図、欲求）を代弁する言葉かけを、親に伝えるように行った。		
ねらい	支援者が子どもの内面に焦点を当て、言語化し、代弁することで、親にモデルを示し、親による子どもの心理状態に関する発言を促進する。		
記述例	例1：児が体遊びでのマッサージに拒否感を示していた際、「やりたくないんだね」と代弁する。 例2：親に「おんぶ」と伝えるが親は応じず。児はぐずり出し「ママ、キライ」と言ったので、「ママにおんぶしてもらいたいの？」と聞くと「うん」と答える。親にはおんぶして欲しくてママキライと言ったんですね、と伝える。		
ねらいに相当する記述数（総数13）	ねらいに相当する 9 (69.2%)	判断が困難 3 (23.1%)	ねらいに相当しない 1 (7.7%)

項目2は、親が子どもの心理的状态を言葉にして発言することを促すために行う支援として考えた。Meinsらの研究（2001）では、母親による6か月の子どもの心理的状态やその過程に関する適切なコメントは12か月時の愛着関係の安定と関連があることを見出している。親による適切なコメントは、それまでの研究で安定した愛着と関連しているとみられていた親の感受性よりも説明率が高かったとされる。親のメンタライゼーションは、子どもの心的状態に注意を向けるだけでなく、子どもの「こころに関する適切な発言」がされることによってよりよい関係性の形成に寄与していると考えられる。項目1の説明で述べたように、発達支援を要する子どもの行動から内面をとらえることに親は苦心することが多い。したがって、子どもの心的状態を適切に言語化してコメントすることはさらに難しく、発言の量としても少なくなることが考えられる。そこで、まず、支援者が子どもの心的状態を言葉にして発言することで子どもの心理状態を親に伝え、ひいては親自身が支援者をモデルとして、子どもの内面を適切にコメントできるようになることをねらっている。

この項目において、ねらいに相当した記述は、総数13のうち9（69.2%）みられた。項目作成時、「子どもの内面を代弁する言葉かけ」は、支援者が子どもに向けて心理状態を直接的に口にすることを想定していたが、記述内容を見ると子どもへの直接的なコメントだけでなく、親に向けて子どもの気持ちを言語化して話すといった記述もみられた。この点は項目1と重なるところがあり、項目2に相当するか判断の難しい記述が3（23.1%）みられた。項目2の支援では実際に発言することが重要であると考え、子どもの思いや意図を言葉にしてコメントしているかが大切な点であると考えられる。

この項目で意図した支援を支援者が行ったことで、実際に親自身が子どもの心理状態について適切にコメントするようになったのかについては、今回確認できていない。今後の検証が必要となる。

3.4 項目3の分析

項目3について、ねらい、記述例、相当する記述数を表4に記す。

表4 項目3のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	親自身の内面（感情、思考、意図、欲求）について話を聞いたり、問いかける言葉かけをした。		
ねらい	支援者が適宜親の内面について話題にしたり、問いかけることで、子どもの心理状態への関心と同様に、親が自分自身の心の状態に気づき、内省できるよう支援する。		
記述例	例1；母の表情が暗かったので”お母さん、疲れてますか？”と声かけすると涙されて、児が寝なかった話をされていた。 例2；食事の時の手づかみが嫌でイライラするとのことで、怒っても仕方がないのに怒った等、皆通る道だよねとイライラに合わせて会話をした。手づかみの何が嫌か？も聞いてみた。		
ねらいに相当する記述数（総数12）	ねらいに相当する 10 (83.3%)	判断が困難 1 (8.3%)	ねらいに相当しない 1 (8.3%)

この項目では、親の心理状態に焦点を当てている。メンタライゼーションは、他者の心的状態だけでなく、自分自身の内面についても認識する心理機能である。子どもと親との関係でいえば、「母親が自分自身の心の状態にも注意を向けながら、子どもを心を持った存在として、意図や気持ちや望みを備えた人間として、思い描く能力」がメンタライジング能力とすることができる（繁多，2019）。項目3のねらいは、親自身の内面にも焦点を当て、親が自身の思いについて内省できること（親のリフレクティブ機能）が、ひいては子どもの内面への関心と理解につながると考えてのものである。特に発達に支援を要する子どもとの関わりにおいて、親は否定的な感情や認識に陥ることがあり、中には自身のそのような感情や思いを一人で抱えている場合もある。親が自身の状態を認識し、それを他者と共有したり内省したりできることが、発達支援の場における親自身への支援としても、親子関係への支援としても肝要であると考えられる。

記述内容を確認すると総数12のうち相当する記述が10（83.3%）みられた。親の内面に関する話や言葉かけは、親子グループでは生起しやすい関わりであるのかもしれない。記述内容の特徴としては、親の方から自身の心理状態（例えば、イライラする）を伝えてくる場合もみられた。同一の親に関して連続して記述がみられる場合もあった。親の心理状態を話題にしやすい人に支援者の関わりが偏ることも考えられる。この点もチェックシートを振り返ることで、支援者に気づきがあるものと思われる。

3.5 項目4の分析

項目4について、ねらい、記述例、相当する記述数を表5に記す。

表5 項目4のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	子どもが親に、あるいは、親が子どもに注目するような関わりを仲介した。		
ねらい	親へ注意を向けることが難しい子どもに対し、どのタイミングでどこに注目するとよいかを、楽しい、無理のない場面設定のなかで親子双方に介入し、親子の相互作用を促進させる。		
記述例	例1：サーキットの時、子どもの隣で「ママー！！」と手を振り親の注目を向けたり、指差し+声かけでゴールの親に注目を向けるよう関わった。 例2：子どもの目線に自分が合わせていくと注目しやすい（視界にも入ると気づいて見たりするので）ことを表現してみた。		
ねらいに相当する記述数（総数13）	ねらいに相当する 11（84.6%）	判断が困難 1（7.7%）	ねらいに相当しない 1（7.7%）

この項目は、注目や注意というものを介してよりよい親子相互作用の促進を支援するために設けたものである。レディ（2015）によれば、乳児の最初の注目への気づきは、まず自己に対する注目から始まり、その後自分の身体部位、モノや空間に対する自分の行為（共同注意にあたる）へと広がるという。ここから、自分に注目が向けられているという体験を快な情動として経験することが親子関係支援につながると考える。一方、対人意識に弱さのある子どもは、人に選択的に注意を向けることが困難である場合が多い。顔を認識したり、視線・意図などを把握する社会脳といわれる脳の部位を調べた研究から、自閉症スペクトラム障害者は、社会脳部位自体の活動が弱いというより、人の顔に自分から注意を向ける傾向が弱いために社会脳が働きにくいのではないかと示唆されている（千住，2014）。また自閉症スペクトラム障害者は刺激をマイクロなレベルで知覚してしまう傾向があるとされ、意味や行動としてまとめあげることには困難があると指摘されている（熊谷，2016）。このことから、さまざまな刺激のある状況のなかで、支援を要する子どもに対して親子相互作用を成立させるためには、親という対人刺激に対してタイミングよく注意を向けるように関わりや環境設定を考えることが重要であると思われる。

記述総数は13あり、このねらいに相当するものは11（84.6%）であった。記述内容をみると、子どもに声かけや身振りなどで親への注意を促す、子どもが親へ注意が向けられるよう親の位置取りや反応を助言する、親に子どもの行動に注目をしてもらいたいタイミングでの声掛けをする、といった支援が書かれていた。また、遊びの環境設定として、ゴール地点に親に位置してもらい、そこに向かって行くことで自然と親に注目がいくように考えられていた。判断が困難な記述1（7.7%）は、子どもの視線の先について親と確認をする支援であったが、親子相互作用を促すものとして相当するのかが判断がつかなかった。

この項目のねらう支援では、人への注意向けを無理強いしては逆効果となることに注意が必要である。子どもにとって快な状況で人への注目を経験することが、その後の対人への注意を高め、対人意識を育てることにつながると考える。子どもに変化を強いるのではなく、関わる大人の側に変化（どの位置にいるか、どのようなタイミングで応答するか、子どもの注意をひきやすい言動など）を求め、遊びや生活の環境設定を変えることで、無理なく注目

への気づきを促していくことが必要である。

3.6 項目5の分析

項目5について、ねらい、記述例、相当する記述数を表6に記す。

表6 項目5のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	親が行うと良いと思われる関わりについて伝えたり、実際に行って見せた。		
ねらい	親に対して子どもとの関わり方について助言をしたり、モデルを示すことにより、親子間でのよりよい相互作用の経験を促進する。		
記述例	<p>例1： マッサージの時、児ボーっとしていて母の声かけが入らない際に「少し待ってみましょう」と声かけ、しばらくすると児からタオルに注目が向き、自分で活動に入れた。</p> <p>例2： 帰る際に親と一緒に本児の様子を確認。声のかけ方や声色、タイミングをお伝えし、本児の状況を確認しながら関わりを伝えることができた。</p>		
ねらいに相当する記述数（総数20）	ねらいに相当する 16 (80.0%)	判断が困難 3 (15.0%)	ねらいに相当しない 1 (5.0%)

項目5は、親子相互作用促進のために、親に対して実際的な支援を行うことをねらっているものである。親子療育グループにおける支援では、親と支援者が同じ場面を共有することができ、子どもの関わりについて即時に、親に助言することができる利点がある。その時の状況に応じて、関わりのタイミングや声かけの仕方について助言することで、親は自らの関わり方を意識し、より適切なやりとりを考えることにつながると思われる。また、支援者が子どもに実際に関わっている様子を見ることで、その姿からモデリングして、親自身の関わりに取り入れることもできるだろう。このチェックシートへの記入により、支援者が親と子どもへの関わりを共有することをねらっている。

記述総数は20で、うち16 (80.0%) がねらいに相当するものであった。記述内容の特徴としては、支援の内容が多岐にわたっている点である。体遊びでの体勢や抱っここの仕方など身体レベルでの関わり方から、声の掛け方や待つて見守ることの助言、上手な場面の切り替え方などが記述されていた。なかでも、子どもへの接触の際の力加減といった感覚・身体レベルでの助言やモデルの提示は、その場で実際に伝達することがわかりやすいことから、親子グループならではの支援といえるだろう。原初的な身体を介した親子相互作用の促進は発達支援の最初期で行われることが望ましく、その側面における親子相互作用への支援が意識されていることも推察された。一方、判断が難しかった3 (15.0%) の記述は、全体での話し合いの際に関わりについて話題にしたという内容であった。全体への話しかけであるため、ねらいにそったものであるのか判断し難かった。

3.7 項目6の分析

項目6について、ねらい、記述例、相当する記述数を表7に記す。

表7 項目6のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	親が子どもと楽しく関われる遊びや活動について仲介したり、情報提供を行った。		
ねらい	実質的な親子のやりとりに対する支援であり、遊びや楽しい活動において快な体験として親子相互作用を促すことをねらう。		
記述例	例1：児が歌絵本に興味があり、歌の一部に合わせて発声することがあった。歌あそび、歌絵本、手あそびを提案した。		
ねらいに相当する記述数（総数4）	ねらいに相当する 1（25.0%）	判断が困難 2（50.0%）	ねらいに相当しない 1（25.0%）

項目6は、親子間での遊びを実際的に支援することを支援者が意識できるようチェック項目として入れた。親子の相互作用を促進するために、実質的な関わり方の援助やグループの活動時間以外でも楽しめる遊び、活動を情報提供できるとよいと考えたものであった。しかし、記述数は4のみであり、ねらいに相当する記述は1（25.0%）であった。この項目へのねらいに相当した記述はほとんどみられなかったといえる。記述の少なかった理由として、このねらいの支援は療育の場において当然のこととして行っており、あえてとりあげて記述する内容ではないととられたのかもしれない。また、他の項目においても親子間の遊びについて記述されており、この項目に遊びを仲介したことを書くという意識が生じないことも推察される。本項目については、検討が必要であると考えられる。

3.8 項目7の分析

項目7について、ねらい、記述例、相当する記述数を表8に記す。

表8 項目7のねらい、記述例、相当する記述数

チェック項目	親や子どもにおけるよい変化について、親と共有した。		
ねらい	変化への肯定的なフィードバックを返すことで、よい関わりができています手ごたえや、また、子どもの変化から自分の関わりにより影響があることを感じられる。親が前向きに子どもと関わることを促進するために行う。		
記述例	例1：父親の声かけが児の良い点をほめる声かけ、児の気持ちを上手に代弁している発言多かった。声かけ良かったことお伝えした。 例2：キーッとなった時に最初の頃はただ泣き崩れ母親もどうして良いかわからず長く崩れていたが、今日はキーッとなると、母親に抱きつき背中をトントンしてもらうとなんとか落ち着けていたので、自分から助けを母親に求められる様になったと話した。		
ねらいに相当する記述数（総数32）	ねらいに相当する 25（78.1%）	判断が困難 25（78.1%）	ねらいに相当しない 2（6.3%）

この項目は、親に対して、子どもや親自身の良い変化を伝えることを意図したものである。支援を要する子どもとの関わりにおいて、親はどのようにしたらよいのか困惑したり、結果

上手くいかずに怒りや悲しみを感じることもある。子どもの行動の意味を解せず手探りで関わっていくなかで、このような関わりでよいのかと悩むこともみられる。その状態に寄り添い、支援を継続しながら、子どものよい変化や親自身の変化に対して肯定的なフィードバックを返すことは、子どもの状態に困惑し自信を失いがちな親にとっては、次への意欲的な関わりにつながるものと思われる。子どもも親も他者から認められる、受け入れられる感覚は安心感を生み、結果、親子の相互作用をよりよいものへと変えていくと考える。

記述総数は32と他の項目に比して一番多く、ねらいに相当する記述は25 (78.1%)であった。変化を伝えるといった支援は、今回のチェック項目の中では実施しやすい、あるいは、振り返って記入しやすいものであったと推察される。その内容を確認すると、子どもの変化について共有しているものが親の変化よりも多く、子ども：親は20：5であった。このことから、支援者は子どもの変化の方が親に伝えやすということであるのだろう。ねらいに相当するか判断の難しかった記述は、親から（保育園、幼稚園での）子どもの変化について話をしてきたというものであった。変化を共有したとはいえ、ねらいとしては支援者からの働きかけを考えていたため、この項目の支援にあたるのか迷う内容であった。

4 結論

幼児期の親子療育グループにおいて、親の子ども理解とよりよい親子関係の促進を目的とした関わりを支援者が行えるよう、支援を振り返るためのチェックシートを作成した。そのチェックシートに支援者が継続して記入する試行を実施し、各項目においてどの程度の頻度で記入がみられたのか、また、どのような支援の内容が記述され、記述内容が各チェック項目の支援のねらいに相当したものであったのかを検討した。結果、項目により記入の回数に幅がみられ、検討が必要であるものが認められた。例えば、項目6「遊びや活動の仲介や情報提供」は、記述数が極端に少ないことから削除することを検討した。他にも、項目によっては作成時にねらいとした支援とは異なる支援内容の記入もみられ、項目の表現に修正が必要であると思われる。例えば、項目1については「子どもの行動の意味や理由としてある内面（感情、思考、意図、欲求）について、発達特性をふまえて伝えた」というように、内面という言葉を入れて、よりメンタライゼーションを意識できるように変更を行うことを考えている。

記述内容の検討から、支援には子どもの発達特性に関する深い理解に基づいた関わりが求められること、その上で、支援者が親子の関係性促進を意識した支援を行っていることが確認された。支援を要する子どもと親との相互作用を支援するためには、即時に子どもの行動からその意図や欲求、感情を読み取り、適切に実質的な関わりを介入していくことが大切であると推察された。ただ、親によるメンタライゼーションを支える支援として作成した項目2や3の記述率が3割程度であることやその記述内容から、子どもの内面や親の内面を支援者が言語化し、親に伝えていくことは、容易ではないことが推察された。メンタライゼーションを促す支援は、実際の相互作用を促す支援に比べて、これまでの療育グループでは

意識して行われていないものであると思われる。それゆえ、支援者側の意識化がとりわけ必要になるのだろう。

今回はチェックシート導入によって得られた記述の内容を検討し、項目内容がねらいに相当しているか検証することが目的であった。しかし、本研究の大目的である「チェックシートが支援者にとって省察の機能をもち、支援の質向上に影響したのか」、さらに「チェックシート活用による支援の質向上が、ひいては親子のよりよい関係性に寄与したのか」といった点については、今回検証に至っていない。効果をどのように測っていくかという課題を残してはいるが、今後、支援者自身や親子から直接取得したデータを分析することにより、チェックシートの有効性を検討したいと考えている。

謝辞

本研究にご協力いただいた施設職員の皆様、保護者の皆様に記して感謝申し上げます。

引用文献

- (1) Bateman, A. and Fonagy, P. *Psychotherapy for Borderline Personality Disorder: Mentalization-Based Treatment*. Oxford University Press, 2004. 狩野力八郎, 白波瀬丈一郎監訳. メンタライゼーションと境界パーソナリティ障害. 岩崎学術出版社, 2008, 488p.
- (2) 児童発達支援ガイドライン. 厚生労働省, 2017. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000171670.pdf> (2021年9月28日閲覧)
- (3) 繁多進. 基礎講義アタッチメント—子どもとかわるすべての人のために—. 岩崎学術出版社, 2019, 248p.
- (4) 熊谷晋一郎. 自閉症スペクトラム症の研究において地域性・時代性に依存するdisabilityと個体側のimpairmentを区別することの重要性. 発達心理学研究, 2016, 27 (4) , p322-334.
- (5) Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., & Tuckey, M. Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on infants' mental processes predict security of attachment at 12 months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 2001, 42, p637-648.
- (6) 三木陽子. 専門家支援を通じた親の障害理解プロセスの検討：異視点の転換プロセス. 生涯発達心理学研究 (白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要). 2012, 4, p39-49.
- (7) ヴァスデヴィ・レディ. 驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称的アプローチ」から見えてくること—. 佐伯胖訳. ミネルヴァ書房, 2015, 363p.
- (8) 千住淳. 最前線の生物学的精神医学研究から考える発達障害—ASD研究からの示唆. 市川宏伸 (編著), 発達障害の「本当の理由」とは. 金子書房, 2014, p22-29.
- (9) Slade, A., Grienemberger, J., Bernbach, E., Levy, D., Locker, A... Maternal reflective functioning, attachment, and the transmission gap: a preliminary study. *Attach Hum Dev*. 2005, 7 (3) , p283-298.
- (10) トマセロ, M. 心とことばの起源を探る—文化と認知. 大堀壽夫・中沢恒子・西村義樹・本多啓訳. 勁草書房, 2006, 344p. Tomasello, M. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press, 1999.

Summary

A Trial of Creating and Introducing a Check Sheet for Supporters in Parent-Child Group at Child Development Support Facilities

Youko Miki

In child development support facilities, parent-child group activities are conducted as a form of support in early childhood with special needs. One of the purposes of parent-child group is to promote parents' understanding of their children and appropriate interaction between parents and children, thereby fostering a better and more stable relationship between them. In this study, a check sheet was created to help the supporters reflect on whether they had provided support in accordance with the purpose of promoting the parent-child relationship so that supporters could be aware of this purpose in the next supporting situation. We had supporters of two parent-child groups filled out this check sheet for 6 months. From the analysis of description content, it was confirmed that it is necessary for the supporters to have a deep understanding of the developmental characteristics of the children and that they were providing support with intention to promote the relationship between the parents and children. However, since some items had only few descriptions and there were descriptions that did not correspond to the purpose, we revised the check sheet for the next effectiveness study.

Keywords child development support, parent-child group,
relationship between parents and children, check sheet

(2021年11月11日受領)